

論文の内容の要旨

氏名： 藤本かおる

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：日本語教育において同期型のオンライン授業を効果的に行うための研究—初級レベルを中心に—

IT (Information Technology) 技術を使って離れている者同士をつなぐことができる同期型システムは、COVID-19 のパンデミック（以後コロナ禍という）により、広く一般的に利用されるようになった。このようなシステムはIT 技術が開発される以前の衛星通信の時代からあり、日本語教育においても利用されているが、その利用は限定的だった。コロナ禍で広がったオンライン授業だが、現在ではオンライン授業が定着する間もなく、通学制の教育機関は対面授業に戻っている。そのため、オンライン授業の検証が十分に行われているとは言い難く、オンラインでの効果的な授業方法がわからないままである教師は少なくないと思われる。オンラインでの学びには様々なメリットがあると考えられる。そこで本論文では、コロナ禍中にオンライン授業を経験した日本語教師に対して調査を行ない、初級日本語のオンライン授業の現状の問題点を明らかにし、今後、効果的に活用できるように具体的な授業デザインに踏み込み、提案を行った。

第1章では、研究の背景を述べ、5つの研究課題を設定した上で、研究の枠組みを説明、本論中の言葉の定義を行い、本論文の構成を示した。

第2章と第3章は先行研究をまとめた。第2章は、「先行研究（1）他分野での同期型システムに関する研究と遠隔教育に関する理論」と題し、主に、工学及びシステム開発分野、双方向でのビデオを介したコミュニケーションについての先行研究を調べ、同期型システムを授業に使う場合の問題点や特徴、同期型システムでのコミュニケーションについて概観した。そして、語学教育において同期型システムを使った実践研究をまとめ、その利用法や語学教育へのメリットについて検討した。同期型システムを使った授業は遠隔教育の1形態であると考え、最後に、遠隔教育に関する理論や、ICTを導入する際の指針となる理論を概観した。

第3章は、「先行研究（2）日本語教育における同期型システムに関する研究」と題し、同期型システムを使った交流型授業と授業実践について先行研究を調べた。これまで日本語教育での同期型システムでの利用から、どのような研究が行われてきたかを概観した。加えて、日本語教師とICTに関する研究から、教師がICTを活用するために必要な条件などを確認した。

第4章は「コロナ禍における日本語教師のオンライン授業に対する困難感の調査」とし、研究課題「1. コロナ禍において授業のオンライン化を迫られた教師は、授業をオンラインにするにあたり、どのような点に困難を感じたのか」を調査するために、日本語教師に対して授業のオンライン化に関するアンケート調査を行った。調査から、授業のオンライン化に際し教師研修が適切に行われていたとは必ずしも言えない状況だったことがわかった。教師の困難感に関しては、対面授業をオンライン化すること（授業のオンライン化）に対する困難感と、同期型システムを使った授業に分けて調査を行った。そして、それぞれのデータを非常勤教師、専任教師、教員、組織運営者という3つのグループに分けてKJ法で分析した。その結果、授業のオンライン化では、3つのグループ全てに「不安に感じていること」、「知りたいこと」、「不満を持っていること」という大きな3つの項目に分けられ、現場の教師と運営者の感じる困難感にほとんど差がなかった。同期型システムを使った授業に関しても、上記と同じ3つの項目があり、それぞれのグループで大きな差はなかったが、非常勤教師と常勤教師では「前向きな姿勢」が、運営側では「やらなければならないこと」という新たな項目が現れた。オンライン授業を具体的に準備する中で、現場の教師にはやる気が芽生え、運営側は教師研修や教師サポートの必要性を感じるようになったと考えられる。そして、教師が困難感を持ったり原因として、オンライン化に対しての準備時間不足、オンライン授業のためのICT環境の不足、オンライン授業に関する経験や知識の不足、前提条件の違いと先行きの不透明さという4つの面から考察した。

第5章は、「オンライン授業で起こった問題とその対処法に関する調査」とし、研究課題「2. 同期型システムでのオンライン授業において、日本語教育ではどのようなレベルや科目で問題が起りやすいのか。そして、問題が発生したとき、解決できない問題にはどのような傾向があるのか」を調べるために、実際にオンライン授業を担当していた教師にアンケートを行なった。筆者はこれまでの

経験から、日本語教育において、初級レベルは中上級よりも授業に問題が多く発生するのではないかと感じている。そこで、実際にどのレベルで問題が起こるのかを調べた。結果として、問題の起こった授業として挙げられていたのは、初級レベルが一番多かった。しかし、中上級や様々な内容の授業や退所者別でも問題が発生していた。解決できない問題には、教室活動に関する項目と学生把握に関する項目が多かった。しかし、同じ問題を感じても対処した教師と対処できなかった教師がおり、対処できなかった問題から協力者を見てみると、教師の年齢や日本語教師の経験、ICT への親和度等の個人的資質についての傾向は見られなかった。そのため、問題が起こった場合に対処できるかできないかに関しては、今後調査が必要だと思われた。

第6章と第7章は、初級のクラスオンライン授業における授業活動において、どのような活動目標および活動が実際に行われているのか、そして、どのようなで活動目標および活動がオンライン授業では効果的なのか、逆に問題が発生するとしたらどのような場合に発生するのかを、教師の授業の振り返りから明らかにした。実際に初級のオンライン授業を担当した教師に、共通のフォーマットでの授業の振り返りを依頼し、授業活動の目的や具体的に教師と学習者がどのようなことをするかなどと共に、教師が思うオンライン授業が対面より良かった点と良くなかった点を記入してもらった。

第6章は、「初級レベルのオンライン授業での教室活動の特徴に関する調査」とし、研究課題「3. オンライン授業の教室活動の特徴は何か。そして、その特徴がオンライン授業にどのように影響しているのか」を明らかにするために、授業の振り返りを改訂版タキノミーで分析した。改訂版タキノミーは、知識次元と認知プロセス次元の2軸で示され、知識次元と認知プロセス次元をタキノミーテーブルで表すが、知識次元は学習内容によって異なると考えられるため、分析に先立ち、本論における初級日本語教育における知識次元サブカテゴリーを設定した。その結果、初級の授業では、練習の多くはパターンプラクティスが多く、ブルーム・タキノミーの基本構造三領域論の「精神運動領域(psychomotor domain)」を鍛える活動が多いことがわかった。精神運動領域を鍛える練習は、繰り返しなどが多い。そのような練習の中で、教師は学生が理解したか、きちんと学んでいるかなどを目視により確認し、学生のノンバーバルな動きで判断したいと考えていた。しかし、ノンバーバルコミュニケーションは同期型システムが最もうまく伝えられないものであり、そのことが初級オンライン授業では、マイナスに影響している可能性があることが示唆された。

第7章は、「教師の授業の振り返りから見る初級オンライン授業が対面授業より勝る点と劣る点」とし、研究課題「4. 初級レベルにおいて、オンライン授業が対面より勝る点と劣る点はどのようなことなのか」を明らかにするために、授業の振り返りに書いてもらった教師が思うオンライン授業の良かった点と良くなかった点を KJ 法により分析した。その結果、教師がオンライン授業の良かった点としていたのは、ほとんどが教育への ICT 活用の良さであることがわかった。そのため、これらは今後、対面の初級レベルの授業で ICT を使う場合でも活用のメリットになりうる。そして、良くなかった点で最も問題になったのは、学生把握ができないことであった。しかしこれは、同期型システムの技術的な限界が関わっているため、教師の努力では改善できない可能性が高いことが示唆された。

第8章は、「第6章と7章からの初級オンライン授業についての考察」とし、研究課題3と4を考察した。ここでは、学生把握ができないことを「交流距離理論」と「プレゼンス理論」から考察し、授業活動が対面と同じにできないことに関しては、「同価値理論」で考察した。そして、最後に、コロナ禍における初級のオンライン授業について、SMAR モデルで概観した。その結果、2020年の初級レベルのオンライン授業は、教室を対面から同期型システム上に置き換えた「Substitution(代替)」であったと言えるが、対面ではできた教室活動ができなくなり、教室コントロールやラポール形成が難しくなったことを補うために使用した ICT が、部分的に教室での学びを拡張し、部分的に授業は「Augmentation (拡大)」していた様子がうかがえた。

第9章は、「結論 同期型システムを日本語教育に効果的かつ意欲的に導入するために」とし、研究課題「5. 研究課題2から4を踏まえ、初級レベルにおいて効果的にオンライン授業を行うためには、どのような授業デザインが必要であり、そのためにはどのようなリソースが必要なのか」を、「オンライン授業を効果的に行うための6つの提案」、そしてその提案を実現するために必要なものとして、物的リソース、情報リソース、人的リソースの必要性として、提言を行った。